



The Relationship between Gaya and Wa Viewed from the Sentence Carved on the Gwanggaeto-wang Stele

白 承 忠

はじめに

①南征以前の加耶と倭

②南征の背景

③庚子年条記事の検討

④「碑文」の加耶と倭認識

むすび—加耶と倭の関係—



「広開土王陵碑文」は、広開土王在位（391～413年）時の高句麗の対外関係をよく示している。この中には、特に百済への征服活動と倭に対する敵対意識が克明に記されているが、ここには加耶も介在している。

初期加耶（弁韓）と倭は、西晋（265～316年）以後5世紀初めまで中国史書には現れないが、これは漢四郡の衰退により対外交路が失われたためである。両国は、4世紀中葉‘帶方界’を掌握した百済との連合勢力を形成するが、高句麗広開土王は‘百済征伐’と新羅救援のための‘南征’の名分をすべて倭との関係から探るなど、三国連合の瓦解を企図していた。

「碑文」の庚子年（400）条には加耶と倭が共に登場する。この記事で注目されるのは、「任那加羅」は征服ではなく‘帰復’したという点、「安羅人戍兵」は‘安羅人を中心に倭人も含む守備兵’であるという点、「新羅城」は安羅に近い新羅辺境の城であるという点などである。「碑文」の加耶についての認識は‘奴客’として内面（inner）の同質的存在である百済や新羅とは異なるが、‘帰復’しているため倭とも違いがある。倭は法道を破った‘不軌’な外部（outer）の異質的な存在である。

加耶と倭は海洋を中心に共通の生活条件をもちながら、早い時期から交流していた。特に、倭にとって‘鉄’資源を持つ加耶との交流は、古代国家成立のための時代的課題であった。南征時、倭が百済の諸兵に応じて加耶と連合したのも、加耶を安定させ‘鉄’を継続的に確保する必要があったからである。両国のこの関係は加耶の滅亡まで持続した。